

MONTREAL

1964/7-1966/12

バーバラ&ノーマン

Barbara & Norman

(マギール大学カステル教授の娘とフィアンセ)

1964-1966

瑠璃子25-27歳

スキヤキ

カステル家のキッチンは明るく広かった。赤いコリウスの鉢の窓辺に、薄地の白いカーテンが揺れている。そろそろ夕食の支度に取りかかる時間なのに、北国の真夏の夕方はまだ昼間のように明るい。

私はまだ慣れないキッチンの戸棚をあちこち開けてみては、お鍋をひとつ、フライパンをひとつといたった具合に探し出していた。背後にいつの間にか帰宅したのか、カステル家の一人娘のバーバラが突然声をかけた。

「ルービー、今夜はノーマンと私に日本のスキヤキをご馳走してちょうだい」

私は一瞬おどろき、戸惑った。というのも、私たち家族がモントリオールに着いたのは、ついその前日のことであり、羽田を1週間前に発ってから、ハワイ、ロサンゼルス、ボストンと、生後10か月のヒデキを抱いて駆け足旅行をしてきた直後だったからだ。昨日からいきなり広いカステル家の1員に仲間入りして、下手な英語を話すのに全精力を使っていた最中で、心の余裕などほとんどなかった。

「スキヤキ？ 食べたこと、あるの？」

「食べたことないから、ぜひ今夜ごちそうして欲しいの。そのお礼に、明日のディナーは、私とノーマンでカナダのステーキを焼いてあげるわ」

カステル教授と奥さんは、夏は毎年ヨーロッパ旅行に出かけるらしい。だが、その年は、私たちの日本出国前に新潟大地震が起こり、カナダ到着の予定日も少し遅れる羽目になったが、カステル教授ご夫妻は私たちがモントリオールに着く日まで、出発を延ばして待っていてくださった。

昨日、モントリオール着。空港からまっすぐに乗りつけたわれわれの車は、鬱蒼とした街路樹の続くストリートを走り、くすんだレンガ建ての家々の建ち並ぶ住宅街にすべりこむと、やがてスピードを落とし、赤と白のベチュニアが咲き乱れるポーチの前で止まった。カステル教授は両手を横に大きくひろげて、ウェルカム、ウェルカムと迎えて下さり、夫人は私と握手しながら、ああ、よかった、あなたは英語が話せますね、バーバラが心配してたのよ、な

どと言った。ご夫妻はその夜、ヨーロッパへと旅立ち、その留守宅にこれから向こう2か月間、ひとり残されたバーバラと一緒に居候させてもらうことになっていた。だから何もそうせつかにスキヤキをせがまなくても思ったが、私がどう返事をするだろうか、やや首を傾げてじっと顔色をうかがっているバーバラを見ると、22歳の娘（ちなみに私は25歳）というより、少女のようにあどけなく、私は思わず笑いながら答えていた。

「OK」

さっそくバーバラと近くのグローサリーにスキヤキの材料を仕入れに行く。スキヤキらしきものを作るにはと、店内をキョロキョロしながら何とか買い集めた。分厚いビーフのブロック肉、玉ねぎ、レタス、卵、チャイニーズ・ソイソース、それに偶然みつけたタケノコの缶詰、等々。およそ日本のスキヤキにはほど遠い品々だったが、中でも中国の醤油にはがっかりした。ふたを取った途端、プーンと嗅ぎなれない強烈なおいが鼻をついたのだ。できあがるまでは、まったく心細く自信がなかったが、すべての材料にソイソースとお砂糖の味がしみ込んで、ぐつぐつ白い湯気が立ちはじめると、久しぶりに懐かしい日本的な匂いが広がった。

水晶のシャンデリアの垂れ下がったカステル家のダイニングルームで、いよいよスキヤキパーティーが始まった。バーバラとボーイフレンドのノーマンは、お世辞でなくおいしい、おいしい、と喜んでたくさん食べてくれる。だが、生卵だけはさすがに辟易した様子で、バーバラはまずノーマンに食べさせてみてから、恐る恐る口に運ぶ有り様だったが、生まれて初めて卵をナマで味わった二人は子供のようにしゃいで、まだ生きてるよ、などとさかんに冗談をとばしていた。

サッカリン

2か月後、夏休みも終わって、私たちは小さなアパートメントを見つけて引っ越した。引っ越しの際も、何かと親切に手伝ってくれたバーバラとノーマンは、その後もしょっちゅうアパートに遊びに来てくれる。その晩もみんな一緒にスキヤキをついたあと、いろいろ雑談し、ジョークを言っては笑っていた。彼らはコーヒーが大好きなので、私はせつせとコーヒーを沸かし、コップについだ。さあ、コーヒーが入りましたよ、こちらにいらっしゃい、と誘うと、彼らは、コーヒーだ、コーヒーだ、と喜んでやって来る。私は彼らの無邪気な姿に好感を覚えながら、テーブルのまん中にお砂糖とミルクを置

いた。すると、彼氏は、そう、そう、ピルを忘れた、と向こうの椅子に脱ぎかけてあった上着から、小さなピンを取り出して、中の小さな白いものをコーヒーに入れている。

「それ、なあに？」

「ああ、これは甘いけど、ノーカロリーなんだ」

「それなら、サッカリンね」

「イエス」

ノーマンはとても性格がよく、お人よしののだが、どうも肥り過ぎの感があった。当人も彼女も気にしているらしく、とうとうノーカロリーのサッカリンを使うことになったようだ。でも、ノーマンがとても甘党なのを知っているの、お気の毒にね、と同情してあげると、ノー、ノー、ぼくにはもっと甘いものがあるよ、それは君さ、とバーバラの顔をのぞきこんだ。こちらの生活にまだ慣れていない私は、何だか気恥ずかしく戸惑ったが、すぐに、そう、そう、彼女はシュガーよりずっと甘いわね、と言ってやった。彼氏は、オー、マイ スウィートハート、とほほえむし、彼女もうれしそうに、ちょっとはにかむ。日本の恋人同士だったらどんなにするだろうと思ったが、サッカリンからこういうことに話が発展するかしら。ちょっとしたユーモアと自然な愛情の示し方が、なんとも微笑ましかった。床に2粒ころがっていたサッカリンを拾い、彼らの帰ったあとのテーブルに並べてみると、なんとなく愉快であった。

ウェディング

その年のクリスマスも間近に迫ったころ、新聞にバーバラとノーマンの婚約の記事を見つけた。さっそくバーバラにお祝いの電話をする。バーバラはさすがに嬉しそう、話している間ずっと笑い声で応答していた。ジューン・プライドらしい。年が明けて、ハッピーな婚約者たちがスキヤキを食べに来たとき、記念に写真や8ミリのスライドを撮らせてもらった。バーバラはいつものように愉快そうに笑っているのに、ノーマンはしきりに恥ずかしがって、ヒデキのトイ・ハンマーでバーバラの頭をポカポカ打ったりして、さかんに照れていた。

いよいよ、6月。結婚式は土曜の夕方。式場はジュイッシュの教会。ヒデキを置いていくのが可哀想で私は失礼したかったが、バーバラに「ルービー、すばらしいから、ぜひ来なさい」と言われ、私たち夫婦は二人そろって出席する。ヒデキは日本人の女のドクターにお願いできた。

カクテル・パーティーのあと、いよいよ結婚式

だ。礼拝堂の椅子は、300人ほどの招待客でぎっしり埋まった。バーバラとノーマンはどちらもユダヤ人なので、男性のほとんどは白いキャップをかぶっている。やがて、オルガンが鳴り、露払いの男たちが順々に入場してきた。近親者の男女ふたりずつが手を組んでそれに続き、みんなニコニコ笑っている。私たちも見逃すまいと一生懸命に首を伸ばして見ていると、あ、来た来た、花婿のノーマンはシルクハットをかぶって母親と手を組んで、続いて花嫁のバーバラは顔まで白いベールを垂らしてカステル教授とニコニコとご登場。だれもが愉快で仕方ないという顔だ。

壇上の牧師さんによって誓いの言葉や指輪交換まで式は順調に進んでいった。が、突然ガシャッ！という音で度肝を抜かれる。ガラスの砕け割れる音。なんと花婿が足元のグラスを靴で踏みつぶしたのだ。ユダヤ人の結婚式のしきたりとのことだった。

めでたく式が終わり、いよいよ陽気なディナー・パーティーの始まりだ。広いホールの壁はバラとカーネーションの花かごで埋め尽くされ、舞台上はバンドが何か演奏している。盛り上がったディナーの途中で、ごきげんの客たちは、カナダの首相やアメリカの大統領にまで乾杯して、大騒ぎ。バーバラにやっと巡り会えたので、長い白い手袋をはめた彼女の手をとって「おめでとう」と言ってあげた。でも、バーバラは黙って突っ立ったままなのだ。え〜？と不審がる間もなく「ルービー、キスしてくれるものと思ってたわ」と言われて、ハタと気づいた。そうだった、そうだった。おそまきながら、バーバラの頬にぎこちなくキスする私。

ダンスパーティーが始まると、バーバラもウェディングドレスをなびかせて踊る。私たち二人も初体験ながら、つられて踊り回った。長いイブニングドレスに豪華なネックレスをつけたご婦人がたに交じって、私一人日本の着物。それも女子大卒業の謝恩会のために母と選んだ派手なお振り袖だ。みんなが珍しがって、私はお世辞の言われればなし。ノーマンは背中に結んだ帯に興味しんしんの様子。「帯を締めると窮屈でアンコンファタブルなのよ」と打ち明けると、「それで分かった、日本の女性が従順で、しとやかなワケが！」と喜んで、はしゃいだ。

パーティーはいつまで続くか分からない。ヒデキが心配でわれわれは早目に会場を抜け出たが、もう夜中の12時をとくに過ぎていた。ヒデキはドクター・コヤマのベッドでよく眠っていた。とって、も、とって、いい子だったようだ。

シスター・フランシス・ザビエル

Sr. St. Francis Xavier

1964-1966

瑠璃子 25-27歳

私たちは白い階段を上りつめ、大きなガラス張りのドアの前に立った。内部をのぞきながら、私は生まれて初めて、修道院のベルを押した。それは、1964年の秋のことだった。留学する主人について、生後10か月のヒデキと共に美しいカナダのモントリオールにやってきて、ちょうど2か月経った頃であった。うっそうと大きな葉をつけたメープルなどの街路樹が、北国の冷たい秋風を受けて一斉に紅葉しはじめていた。

どなたか英会話を教えて下さる方はいないかしらと、英会話の必要性をひしひしと感じていた私たちに、シスター・フランシス・ザビエルの名前を覚えて下さった方があった。昔、日本にいらしたことのあるオバアチャンですよ、とその方は言う。私はさっそく修道院のシスターに手紙を出した。すると翌日もう電話のベルが鳴り、「ハロー、ミセス ナカザワ？」と可愛らしい声が耳に飛び込んだ。「今ちょうど空いてますから、来週からいらっしやいな。ベイビーも連れていらっしやいな」と実に嬉しいお返事だった。

楽しいレッスン

修道院のドアは若いシスターによって開かれ、私たちは広いホールに通された。そこには、日本を含めフィリピン、タイ、インド、アフリカなど伝導にあたった各国の珍しい物品が、大きなガラス戸棚に数多く陳列されていた。ホールの中央には3つの丸テーブルがあり、まわりにずらりと椅子が並べてある。ここが面会室であり、また私たちのレッスンのお部屋でもあった。

シスター・フランシス・ザビエルは優しい笑顔で私たちを迎えてくださった。外国人にありがちの恰幅のいいおばさんではなく、痩せっぽちの私より華奢で小柄で、黒いベールと長い白い衣がよく似合っている。色白でこじんまりした品のいいお顔たちで、物腰も実に柔らかかった。

レッスンはフリー・カンバーセッションで行われ、私たちは実にいろいろ話をした。日本の話、カナダの話、宗教の話、政治、経済、歴史、地理の

話、家庭や子供の話、果ては主人の専門である脳外科の話まで。こうした私たちの勝手気ままな話題にいつもすんなり話を合わせてくださるシスターの博学ぶりは、実に驚嘆に値した。しかも可愛らしくユーモアの才にもたっぷり恵まれているのだ。

ある日、話題は日本流の謙遜の仕方に及んだ。それは、シスターが私の英語がうまくなったと褒めてくださった時、主人が「オーノー、とんでもない」とすぐさま否定したのに端を発したのだが、昔日本にいらしたことのあるシスターはそんな習慣もよくご存知で、可笑しそうに体験話をしてくださった。修道女志願の娘が両親と一緒に修道院にやって来た。両親は何度も頭を下げながら娘を紹介したのだが、それを聞いたシスターたちは娘さんを本当に知能の低い何もできない人と勘違いしてしまい、それは可哀想に、お気の毒にと、いたく同情してしまったというのだ。ご両親の言われた言葉をそのままシスターが英語で話されると、それはもうひどく滑稽で思わず吹き出してしまった。

その日のレッスンが終わり、私たちが立ち上がると、シスターはテーブルの花瓶から花を抜き取り、くるくると紙に包み、「ちっともきれいでありませんが、どうぞ」と言って渡して下さった。シスターはすぐくユーモアのある方なのだ。

黄菊の鉢

シスターとのお付き合いも相当すすんできたある日、修道院から電話があり、シスター・フランシス・ザビエルが風邪で寝ているので、今度のレッスンはお休みということだった。

翌日は私たちのレッスンの日に当たっていた。主人と私は、いつものペンとノートの代わりに、美しい花をいくつもつけた大輪の黄菊の鉢をかかえて修道院を訪れた。外来者のベルに応じる受付の若いシスターに黄菊の鉢を託して、私たちは再び夕暮れの歩道に下り立った。すっかり裸になった街路樹の上に、白い月が出ていた。

まもなく、シスターご回復の報が伝えられ、私たちは久しぶりにシスターとホールの丸テーブルを囲んで座っていた。溜まった話に花を咲かせながらも、お疲れではありませんかと時々気遣う私たちに、その都度「ノー、ノー」と明るく否定されながら、予定時間までずっとレッスンを続けて下さった。そのレッスンも終わり、帰りぎわに、シスターはもう一度黄菊のお礼を言われ、「玄関に飾っておいたのをご覧になりましたか」と聞かれた。うかつにも、私たちは気づかず素通りしていた。シスター

は、私たちの先に立って玄関の方に歩いて行かれた。玄関の受付のロビーの隅に、見覚えのある黄菊の鉢が置かれてあった。「いただいた時と変わらないでしょ」と嬉しそうに言われるシスターのお言葉どおり、それはまだ生き活きとして華やかだった。気づくと、私たちが差し上げた時の茶色い素焼きの鉢はぐると美しい銀紙でおおわれていて、すごく豪華になっていたのである。大輪の黄菊が一段と華やかに咲き誇っているように見えた。幾日も前に差し上げた黄菊を、これほどまでに大切に少しも色香を衰えさせぬばかりか、一層美しく華やかにして見せて下さったシスターの優しいお気持ちが、黄菊の香りと共に、ほのぼのと伝わってくるのであった。

生活の一部となったシスター

モンリオールは、冬が少し長過ぎるのを除けば、全く素晴らしい都会で、4月の雪解けと共に若芽が一齐に吹き出し、小鳥が鳴き、リスが走り、数カ月間雪に埋もれていた芝生が青み、花が咲きと、それはそれは素晴らしい春である。それから、私たちが最初にシスターにお会いした時のように、木の葉が紅葉し始めるまでの数カ月間は、自然美にあふれる爽やかな夏で、誰もが戸外に誘い出される。目もさめるほど美しい紅葉が秋陽に輝きながら散り尽くすと、粉のように柔らかな雪が降り始め、また半年、家々の前庭はすっぽりと雪に埋もれてしまうのだ。しかし、冬には冬の風情があった。降りたての雪を照らすまばゆい太陽。静かな、寒さの全く感じられない雪の夜。月光に冷たく輝く氷った木々の枝々。トマス・ハーディーの文章を思わせるような吹雪、。私たちはこれらの季節の推移をしみじみと感じつつ、それを俳句に詠んだりしながら、2年間、毎週1度ずつ、夕暮れの中の修道院を訪れた。

自然美の豊かなモンリオールに私たちはすっかり魅せられてしまった。ウィークエンドになるのを待ちかねて市内のあちこちに散在する美しいパークを訪れ、緑の木陰を散策した。天気の良い日には、朝からヒデキの好きなサンドイッチを持参して、ゆっくりと自然の中に浸るのであった。初めのうちは乳母車に乗っていたヒデキも、いつの間にか青い運動靴をはいて緑の中を飛び回り、リスと追いかけてごっこをするようになっていた。シスターは、私たちのこうした週末の過ごし方をよくご存じで、レッスンの初めには必ず「先週はいかがでしたか」と訊ねてくださった。また週日には、毎度のようにシス

ターが貸して下さる本を辞書を片手にひもといっている私で、こうしたモンリオールの生活は、いつしかシスターとは切っても切り離せないものになっていた。

私はシスターから実にいろいろなことを学んだ。英会話のレッスンもさることながら、聖職にある彼女の人となりを通して、他の人からでは決して得られなかったであろうある光明が私の心に灯された。シスターとひとつテーブルに座り、彼女の青い瞳と小さく可愛い口許を見つめていると、自然と心が安らぎ、平和な気分を満たされるのであった。自分の至らなさを素直に認め、生きていることの喜びがひたひたと胸に押し寄せてくるのも彼女の前でのことだった。

お別れ

1966年の12月の初め、私たちは主人の都合で、懐かしいモンリオールを後にして、アメリカのボルチモアに向けて列車でいった。私がシスターに最後にお会いしたのは、出発の少し前の薄ら寒い曇天の日であった。

例年、私たちのシスター主催によるクリスマス・パーティーが、モンリオール在住の日本人家族のために催されていたが、そこに集まる子供達の何よりの楽しみは、パーティーの終わりに配られる可愛らしいバスケットに入ったキャンディーだった。キャンディーを入れる小さなバスケットは、いつもシスターご考案の手製のもので、シスターにお世話になっている日本人の奥さん方が数名そのお手伝いに当たっていて、私もその一人だった。お金をかけた豪華なものを作るのは容易だが、私たちの作る100個ほどのバスケットはすべてが廃品利用なのだ。長いことかかって溜めたヨーグルトのプラスチック製容器に、洋服屋などから寄付してもらったきれいな色の余り布や余り紙を、シスターのお指図どおり切ったり貼ったりしていくと、次から次へと、びっくりするよう可愛らしいバスケットができあがっていく。クリスマス・パーティーのためには、鮮やかな緑の葉っぱの中に、まっかな花びらを咲かせたポインセチアのバスケットが、またイースターの集まりには、人参を口にくわえた赤いお目々のウサギさんのふわふわバスケットが、といった具合だ。

私が最後にシスターにお会いした日も、近づいたクリスマスを前にして、こうしたバスケットを作るために修道院を訪れた日であった。もうすっかりシスターたちや修道院のホールにも慣れてきたヒデキ

を傍らで遊ばせながら、私は他の日本人の奥さんたちと一緒に、シスター・フランシス・ザビエルを中央に、他の2人のお手伝いのシスターを交えて、楽しくおしゃべりしながらバスケットを作っていた。その日のバスケットは、お洒落なグリーンでぐるりとおおわれたプラスチックの容器を、さらに白ペンキでお化粧した松ぼっくりと美しいリボンとで飾り付けたものだった。カナダの松かさ、日本の松かさのように丸くずんぐりしたものではなく、もっと長々と大きなもので、珍しかった。北国の冬はすぐ暮れる。まだ時間がありますから、もっと作りましょと、手を休めようとしないうちに、シスターはもう暗いからと無理に帰り支度をさせた。ボルチモアへの出発の日も迫り、引っ越しの用意で慌ただしい私は、もう修道院へは来られそうもなかった。自ら彼女に握手を求め、2年間の積み重ねたお礼を述べた。シスターは私の差し出した手を両手でしっかりと握って下さり、静かにうなずかれながら、その合間に何度もこう繰り返された。「We shall meet again in Heaven.」

その言葉は、単に私だけに言われたのではなく、シスターご自身にも言い聞かせるような深い響きがかめられていたので、私は胸が熱くなった。シスターの手は白く小さかった。シスターは青い眼をうるませて、私の手をいつまでも離さなかった。口ではとても言い尽くせない私の感謝の念を、握った手を通して静かに汲み取って下さっているようだった。

シスターは私の手を握ったまま、傍らの若い修道女に言いつけてキャンディーを持って来させた。そして、たった今作り上げたばかりの可愛らしい松ぼっくりのバスケットの中から、一番形よくできたのを選んでキャンディーを入れ、すでに3歳になっていたヒデキの手の中に置いて下さった。いつもはレッスンの終えた後、シスターがご自分のお部屋に戻られるのを私たちがホールのドアを開けてお別れしていたのであるが、その日は、逆にシスターが私を玄関まで送ってくださった。私は何か勿体ない感じがして、日本式にシスターに頭を下げてお別れし、玄関の大きなガラス張りのドアを押した。

あたりは既に夕闇が濃く、玄関の正面に立つマリア様の白い像が黄昏の中にぼうっとに浮かび上がっていた。私はヒデキの小さな手を取って、一段一段、白い石段を下りた。暖かいホールから出てきて、外は寒かった。石の階段を下りきり、マリア像の横に道を折れる時、見おさめのつもりでもう一度修道院を振り返った。大きな白い修道院の窓々には

ポツポツと暖かい明かりがともされていて、それは2年間見なれてきた修道院の姿であった。だが、玄関の大きなドアのガラス越しに、先程と同じ姿勢で静かに立ち、まだじっと私と息子を見守っていられたシスターのお姿を、私は認めた。

暗い歩道で冷たい冬の夜風に吹かれながらバスを待つ私は、キャンディーの入った松ぼっくりのバスケットを大事そうにしっかりと胸にかかえているヒデキと同様に、暗闇も風の冷たさも感じずに、胸中にうずまく唯一の思いをじっと温めているのであった。

一家でアメリカのボルチモアに移り、年も明けてから、シスターから一通の手紙を受け取った。それにはシスターの自筆で、「クリスマス・パーティーにあなたの方の姿が見えないのは残念でした。今度のイースターの集まりは3月〇日ですが、来て下さいますか」と、シスター特有の茶目っ気で、そう書かれてあった。

リスと紳士

1964 (瑠璃子25歳)

モントリオールに来て数カ月経ったある秋の朝、もうすっかり重くなったヒデキを抱いてあやしなから、リビングルームの窓から外を眺めていた。アパートは2階なので見晴しがよく、燃えるような紅葉がはらはらと散り始めた木々の枝越しに、静かなストリートと、その向かい側のアパートの広い前庭がよく見える。人通りの少ない歩道を時々落ち葉が乾いた音を立ててころがり、それが私に卒論に選んだトマス・ハーディーの小説などを思い起こさせ、さらに女子大生のころの記憶にまで遡らせた。そんな時、ふと動くものが目に入る。一人の紳士が向かいのアパートから出てきて、前庭の途中で止まった。黒いハットと黒い背広姿の立派な紳士だ。その人は庭のまん中で立ち止まったまま、動かない。時々まわりを見渡すが、ポケットに手をつっこんで、いつまでも立っている。誰か人でも待っているのだらうと、私はそれほど気にも留めずに、またぼんやりと遠くを眺めながら、子供にシューベルトの子守歌などを口ずさんでいた。

しばらくして、何となく下を見ると、さっきの紳士は芝生にしゃがみこんで手を伸ばしているではないか。思いがけない姿勢に、その手の先に目をやると、小さな1匹のリスが、手のほうに首をのぼしながら、行ったり来たりしている。紳士はただじっと手を伸ばして根気よく待っている。リスは臆病そうに10数秒ウロウロしていたが、思いきったか、すうっと手のところに走りより、その手から何か白いものをくわえると、2、3歩さがって、おいしそうに食べ、またチョロチョロと手まで来てくわえては、安全地帯に戻って食べていた。3、4回そんなことを繰り返すと、もうエサがなくなったのか、その紳士は静かに立ち上がり、しばらくリスを目で追っていたが、リスが木の陰に消えると、何事もなかったように姿勢正しく歩き出し、アパートの中に入っていった。

私は偶然見たその光景に心が温められた。一人そっと食卓のパンなどをポケットに入れて、リスにあげようと思うときの、その豊かな心根が微笑ましかった。何か美しいピアノの小品を聴いたあのように、ほのぼのとして幸福だった。

パンくずと掃除機のゴミ

1965 (瑠璃子26歳)

モントリオールに来て、最初に住んだアパートは、古いレンガ造りのフラットで、豊かな街路樹に埋まるように建っていた。リビングルームの窓は緑に染まり、爽快この上なしで、幸せだった。裏側には小さな庭があり、それを見下ろしてベランダがついていた。ベランダは隣と共通だったので、ゴミを出すときや洗濯物を干すときなど、2階どうしの隣のおばさんとよく顔を合わせた。その都度、ひとこと、ふたこと、たわいのない言葉を交わすていどのお付き合いだったが、とても気のいい人で気楽だった。「1歳のヒデキがうるさいでしょう」とお詫びを言っても、「ベイベーの声なんて、ちっとも苦になりませんよ」と笑って返してくれる親切なおばさんだった。

ところが、年も明けて、モントリオールで初めての春を迎えたころから、隣のおばさんの行動が少し気になりだした。2階のベランダから下にいろいろゴミを捨ててしまうのだ。掃除機の先に絡まったゴミを、指ではぎ取っては下の地面に捨ててしまう。まな板に残ったパンのカスなども、ポンポンと手で叩いて捨ててしまう。もちろん私は何も言わなかったが、もしかして顔に出てしまったのかもしれない。ある朝、まな板のパンくずを捨てながら、おばさんはちょっと恥ずかしそうに言った。

「小鳥たちがパンくずを喜ぶからね。掃除機の柔らかいゴミは、巣作りに最適だしね」

ああ、そうだったのですねえ。今まで気づかなくて自分も恥ずかしかった。おばさん、すごいじゃないですか。りっぱですね。小さな動物たちへの思いやりに満ちたおばさんは、ほんとうに偉大です。すてきなおばさんと隣人になって、なんとも幸福ですよ。うれしい春の朝だった。

マダム・ボードリーの想い出

Madame Jacqueline B. Beaudry
(フランス語の先生)

1966 (瑠璃子27歳)

一つの広告

モントリオールで迎えた2度目の冬の寒さも峠を越すころだった。その夏の帰国予定を少し延ばして、ポルチモアのジョーンズ・ホプキンス大学にも留学できたらと、ウォーカー教授に手紙で問い合わせていた頃だ。アパートのリースも春には切れるので、何となく落ち着かない日々だったが、一つの広告が私の気持ちをぱっと明るくしてくれた。「学生のワイフのためのフランス語教室。毎水曜日、午後2時より。先生はマダム・ボードリー、ベビーシッターもいます」と書いてある。それは、すぐ近くのスチューデント・センターの広告だった。

スチューデント・センター

そのスチューデント・センターは1軒の大きな美しいハウスをそのまま丸ごと使っているの、とてもアットホームで居心地がよい。玄関を入ると、大きな暖炉のあるリビングルームに続き、英語や仏語の教室にもなるダイニングルーム、裏庭に面した明るい図書室、それにキッチンとバスルームがある。2階は、センターを管理し、学生の世話をしてくれる5人の若い女性の個室だが、ベースメントには卓球台やピアノ、コカコーラのマシンなどがあり、学生たちに人気があった。

フランス語教室の初レッスンは、2月のモントリオールにしては珍しく寒気がゆるんで暖かな日だった。2歳のヒデキと手をつないで、定刻よりかなり早目にセンターに着いたが、すでに生徒の何人かは来ている。その日に集まったのは、サリー姿のインド人6人と、アフリカはナイジェリアから来た人と、あとは日本人の私の8人。センターの人たちは、私が加わったために国際色が豊かになったと喜んでくれた。

長方形のダイニングテーブルを囲んで先生を待つ間もなく、上品で美しい婦人がボンジュール<Bonjour>と優しい笑顔で部屋に入ってこられた。先生のマダム・ボードリーはすらりとして、色白で金髪。トビ色の眼が柔和だ。レッスンのレベルはかなり低かったが、仏語は話すのも聞くのもすごく骨が折れるので、結構ためになり、楽しかった。

レッスンが終わると、隣のリビングルームで遊んで待っていた子供たちや赤ちゃんも一緒になって、楽しいティータイムだ。インド人の赤ちゃんはお靴をはいていないのに耳輪をつけていたり、アフリカ人の可愛い黒んぼの赤ちゃんは大きなお目目をキョロキョロさせて、ママのお膝から皆を仔細に研究していたり、もう歩けるようになった子供たちはクッキーを両手に走りまわり、もう少しで母親の紅茶をこぼしそうになって叱られたり、こうした子供たちが加わると、すべてが母親の私たち生徒はとて饒舌になるのである。

生徒たちは皆陽気だった。ほとんどはインド人で、色とりどりのサリーをひらひらさせていた。長い黒髪を三つ編みに垂らした利口そうなアルム、サリーの着こなしが一番上手で美人のスネー、フランス語はちっとも出来ないのに気のいいマビス、予習復習をきちんとしてくる真面目なモニカ、濃いアイシャドウのお洒落なニリマ。

センターに通い出して3回目の日のことだった。レッスンが終わり、おりこうさんで待っていてくれたヒデキと遊んでいると、マダム・ボードリーが脇に来られ、おっしゃった。「ルビコ、月曜に別のレッスンがしてあげられるけど、よかったですか。」何という嬉しい申し出で。感激だった。大勢のインド人の生徒の中で一番熱心なアルムが仏系の大学で勉強することになり、もう少し高度のフランス語の習得が必要になったので、マダム・ボードリーが特別にご自宅で教えることになったのだそう。日本の大学で仏語を学んでいる私のレベルに丁度いいから、アルムと一緒に教えてあげましょうという親切なお心遣いだった。

ご自宅でのフランス語レッスン

マダム・ボードリーのご自宅は、ヒデキと一緒に15分ほどの距離にあった。古風でくすんだレンガ造りのハウスが建ち並ぶ中、先生のハウスは、赤い屋根と赤い窓枠のほかは、まっ白な石造りで、童話の家みたいに可愛かった。その日は珍しく暖かい3月の午後で、2日前に降った雪もその暖かさで大分解け、あちこちに小さな流れができていた。ブーツで水をバシャバシャするのが大好きなヒデキが大喜びだ。親子とも心がはずんだ。

玄関のチャイムを鳴らすと、マダム・ボードリーのアントレ<Entrez>という声よりも早く、しっぽを振りながら迎えてくれたのは、まっ黒な巻き毛のブードル犬。ジジという名前のその犬は、その日からヒデキと大の仲良しになる。

古風な鏡のかけてある玄関の左手は、明るくゆったりとしたリビングで、ふかふかの絨毯の上には大きなソファやアームチェアがよい具合に配置してあり、暖炉の上には珍しい小物がたくさん飾ってあった。そんなお部屋の片隅に、なんとも不釣り合いな木の箱が置いてある。先生はその箱のふたを開けて中からおもちゃを取り出すと、ヒデキに手渡してくださった。なんとそれはおもちゃ箱だったのだ。

「先生には小さなお子さんがいらしたのですか？」と思わず聞いてしまった私に、「ノン、孫がいるんですよ、大勢ね」と笑いながら言われた。私は改めて驚いてしまった。どう見てもまだ42、3歳の美しい方で、赤いスーツも、コバルト色のスーツもすてきに似合う方なのだから。

アルムと私の二人だけのレッスンは裏庭に面した明るいダイニングルームで行われた。丸いテーブルの上に私たちは本やノートをところ狭しと広げて、英語混じりの怪しげなフランス語で悪戦苦闘し、口の中もカサカサになるほどだった。レッスン後はアルムの坊やとヒデキも一緒になってジュースやクッキーをごちそうになりながら、英語でしゃべるのは何て楽なことかとほっと一息つくのだった。

イースターが間近に迫ったその日は、どんより曇った空から今にも雪がちらつきそうな気配だった。風の強い寒い日がもう2、3日も続いていて、とても4月に入ったとは信じられない。暖かい暖炉のお部屋で、「イースターは私たちカソリックにとって、1年のうちで一番大きな祭日なんですよ」と話される先生を見て、私は何かほっとした。やはりカソリックでいらしたのだ。そうでなかったら、一体誰が、インド人や日本人の私たちに、こうまで優しくいろいろ面倒をみてくださるだろうか。

イースター・パーティー

イースターの朝、電話が鳴った。ハロー、ルビコ？とゆっくり尻上がりに話す声は、まさしくマダム・ボードリーだった。

「午後から娘たち家族が来るので、よかったら、ハズバンドとヒデキと一緒に3時頃いらっしやいませんか？」

ご家族の団欒に招かれて、ちょっぴり緊張しながらも、私たち親子3人は、3時前、盛装して家を出た。風のない穏やかな日で、楽しいイースターの雰囲気が大通りにまで流れ出ていた。道路は家族連れの車の洪水であり、教会の前は出る人と入る人の波が入り乱れて賑わっていた。

マダム・ボードリーの玄関に通じる白いコンク

リートの小径のほうへ、ヒデキはもう慣れたもので一人で先に走って曲がって行った。ドアが開くと、真っ先に跳んできた犬のジジのあとに、マダム・ボードリーとご主人がニコニコと出て来られた。先生はグレーがかかったブルーのドレス。傍らのご主人は品のよい穏やかな老紳士で、面影がどこか英文学者の斎藤勇先生に似ておられた。割とお年の離れたご夫妻とお見受けしたが、洗練された上品さとい、穏やかで優しい物腰といい、なんともお似合いのご夫妻である。

「娘たちはまだなのよ」と、ちょっと申し訳なさそうにおっしゃって、私たちをリビングルームに導いてくださった。もうすっかり見慣れたリビングルームであるはずなのに、初対面のご主人も交えて、少しあらたまった口調でお話していると、お部屋がますます広く立派に感じられ、緊張した。

お孫さんが10人

その時ドアのチャイムが柔らかく鳴り響き、ジジがさっとドアに走っていった。一番上の娘さん一家の到着で、静かだった家がいっぺんに賑やかに騒々しくなった。ご夫婦のお子さんは男の子ばかり4人いて、上のお子さんはもう私より背も高かったが、末の坊やはヒデキと同じくらいで、私たちを見ると恥ずかしがって母親のスカートに隠れてしまった。

まだすっかり自己紹介も終わらぬうちに、第2のチャイムが鳴り、2番目の娘さんの家族がやって来た。そちらの方は、みな年子のように見える可愛らしいお子さんが6人で、特に双子のようにそっくりに長い髪をすらっと垂らした2少女が可愛かった。子供たちはグランパとグランマにご挨拶がすむと、今にもめいめい好き勝手な方向へちりぢりに散っていきそうなるのを、両親は一人一人大声で呼び集めて、私たちに紹介してくださった。

広いリビングルームもいつしか一杯になった。賑やかな子供たちに囲まれて気づかなかったが、いつの間にか末の娘さんもいらしていた。マダム・ボードリーの3人の娘さんのうち、末の娘さんだけが大部分が離れているらしく、20歳前後の若いミスでいられた。

ダイニングテーブルには、楽しげなイースターのお菓子たちが並んでいる。ハムやチーズの入った三日月形のパン。メープルシュガーでつくったハート型のお菓子。中でもメインは赤いリボンで飾られた大きなチョコレート製のイースターエッグで、ラグビーボールより大きい。ワイワイとお孫さんたちに取り囲まれて、マダム・ボードリーがイースター

エッグにナイフを入れる。分厚いチョコレートの殻は子供たちの歓声を受けて次第に細かく砕かれた。陽気にはしゃぎながら、めいめいイースターエッグのかけらを手にした子供たちは、ヒデキともすっかり仲良くなっていった。特に長い髪の双子のような2少女は、ぼっちゃり顔のヒデキが気に入ったらしく、いつもそばにくっついてお姉さん顔でいろいろ面倒をみてくれた。そして、時々私のところに走ってきては、聞いた。

「ねえ、今ヒデキがチョコって言ったわ。チョコってなあに」

「ショコラのことよ」

「ショコラは日本語でなんていうの？」

「チョコレートよ」

二人は喜んで、わあ〜い、日本語をひとつ覚えたわ。チョコレート、チョコレート、と歌うようにはしゃいで繰り返した。まだ英語を知らない幼いふたりに、チョコレートは本当は英語であることを説明する必要もなかった。私は少女たちの得意げな後ろ姿を見送りながら、その姉妹のママさんと声を揃えて笑ってしまった。

パーティーが終わると、マダム・ボードリーはダイニングルームの食器棚の上にずらりと1列に並べてあった小箱をひとつずつお孫さんたちに手渡された。どれも同じ白い箱で、ピンクのリボンが結んである。その一つをヒデキにも下さりながら、私と主人に愉快そうに言われた。

「ドミニクとクレール（例の2少女）がヒデキが大好きなんですって。大きくなったら、ヒデキのようなベイビーが欲しいって言ってましたよ」

総勢10人のお孫さんが次々としているように、ヒデキもマダム・ボードリーにキスでお別れをしたあと、夕暮れの歩道を、子供の足ではかなりの距離にある我が家まで、箱の中身を見たさに走り通した。両手で胸にかかえた箱の中身も、楽しげにカサカサと鳴り続けた。

イースターを過ぎるころから、モンリオールも長い冬からやっと解放される。徐々に木の芽が吹き出し、青み初めた芝生の間からクロッカスやチューリップなどの顔ののぞく。マダム・ボードリーの家に行く道は、堂々と枝を伸ばした街路樹が見渡す限り道の両側に続く美しいストリートで、4月も終わるころは、格好の散歩道となっていた。うららかな春の陽射しを浴びて樹の枝々は白く光り、その梢には出始めた木の芽が赤く可愛らしい。

マダム・ボードリーはフランス語の朗読を吹き込んだレコードをたくさん持っておられた。私は、中

でも、ジェラルド・フィリップの"Le Petit Prince"が好きで、何度も聴かせていただいた。大きなソファに身を埋めて、じっと目を閉じて聴いていると、その幻想的な世界にすっかり引きずり込まれてしまうのだった。

小さな木の芽もいつしか可愛い若葉となり、街路樹の続くそのストリートはふんわりと薄緑色に包まれた。マダム・ボードリーの裏庭にも紫色のモクレンが豪華に花をつけた。レッスが終わるや、先生はいそいそとアルムと私を裏庭に案内して、「ほら、やっと咲いたんですよ、マグノリアが」と、いかにも嬉しそうだった。モクレンをマグノリアというのも、その時はじめて知った。

先生は、フランス語教室の生徒たち全員を、時々ご自宅のティー・パーティーに招いてくださった。生徒の大部分がインド人であったので、先生はわざわざインドの布地で作ったドレスを召されたり、インドのお茶を煎れてくださったりと、細やかな気遣いを示してくださるのだったが、それにも増してみんなを大喜びさせたのは、夏の1日を先生の山荘に、家族共々、ご招待してくださったときだ。

ローレンシャンの山荘

中央に小高い山があるモンリオールは、市そのものが緑のパークのようなのに、わずか2時間足らずのドライブで、その名も美しいローレンシャンと呼ばれる山岳地帯に行ける。春夏はピクニックや湖遊び、秋は紅葉狩り、冬はスキー、スケート、橇遊びと、ローレンシャンは四季を通じて市民の憩いの場所となっている。そのローレンシャンのサマーハウスに私たちが招かれた日は、モンリオールの木々もすっかり鬱蒼と茂った初夏の日であった。珍しく蒸し暑くさっぱりしない日だったが、車でしばらく北上すると、窓から吹き込む風がひんやりと冷たくなり、窓外の景色も、いつの間にか山岳地帯の風情だ。教えていただいた地図通りに車が走っていると、やがてボードリー家のプライベート・ロードに出た。奥に大きな湖が見え、そのほとりに、針葉樹林を透かして、大きな山荘が現れた。

車の音を聞きつけて、真っ先に跳び出てきたジジを先頭に、マダム・ボードリーとご主人がいそいそと出迎えて下さった。見れば、おふたりともサンダルにスニーカーといった軽装で、すっかり若やいでいられる。

車から下りると、外は肌寒いほどのすずしさで、モンリオールの暑さはまったく嘘のようだ。こもり繁った木々の緑が爽やかな初夏の風にゆらぎ、

すぐ下方には青い湖が静かに横たわっている。山荘はマダム・ボードリーのご主人の設計だそうだが、木目の出た白木のままの造りで、ベッドルームが4部屋もある大きなものだった。

その日の客は、私たち家族3人の外に、乳飲み子も交じったインド人家族が3組、それにスチューデント・センターの女の人が2人だ。マダム・ボードリーの末娘のフランソワーズとフィアンセも来たので、その広いリビングルームもさすが一杯だった。

山荘から続くゆるい坂道を少し下ると、すぐ目の前にまっ青な湖が広がる。起伏の緩やかな緑の山々に囲まれて、湖は清らかに澄み、水面はかすかにさざ波をたてている。カーディガンをはかしてもまだ肌寒いくらいなのに、フランソワーズとフィアンセの威勢のいい陽気なかけ声につられて、男たち数人がその冷たい湖に飛び込んだ。静まりかえっていた湖はにわかに活気づき、水面に映っていた木々は大きく揺れ、白い泡が飛んだ。私はヒデキの手をひいて湖のほとりの大きな岩によじ登り、その威勢のいい泳ぎ手たちに声援を送った。ヒデキは初めて水泳というのを見て、興奮していた。

「ダディー、スウィミングしてる。フィッシュみたいね」と、英語と日本語をチャンポンにして、はしゃいだ。

やがてボートと赤いカヌーが湖に浮かべられ、泳ぐ勇気のない私たちも順々に乗り込んだ。青い湖を1掻き1掻きオールでこいでいくと、周囲のなだらかな山々はゆっくりと輪郭を変えていく。湖は山々を映して緑色のさざ波をたて、日の光を受けて白く輝いた。湖上を吹く風は一層さわやかだ。

マダム・ボードリーは夏になると週末ごとにそのサマーハウスに来られるとのことだった。

「彼女は田舎が好きなんです。週末になるとせがまれますね」

と、ご主人は目を細めて言われた。誰もいない静かな湖に優しいご主人と二人だけで睦まじくボートを浮かべてられる先生は、まさしく幸せを絵に描いたような方に思われた。

1日山歩きやボート遊びで快く疲れた私たちは、三々五々連れだつて山荘に戻った。リビングルームの椅子にそれぞれ落ち着いて、その日の冒険を披露しあいながら、皆で持ち寄ったサンドイッチ、フライドチキン、サラダなどで夕食を楽しんだ。山のように積まれたフルーツやケーキも、あつという間になくなった。日の長い夏もいつの間にか暮れていった。濃い夕闇の中に、ひとつだけ赤々と灯された山荘のリビングルーム。いつしかあたりの山々や湖

は、はてしない夏の夜空の下に、黒々とした存在と化していた。

先生の淋しさ

夜もだいぶ更けたころ、私たちはやっとおいとまを告げた。夜風はすずしさを通り越して寒かった。車を運んで曲がりくねった暗い山道を越えて行きながら、一緒に乗り合わせたスチューデント・センターのシモンズとその日の思い出を語り合ううちに、いつしか私たちの車は明るいハイウェイを一路モントリオールに向かって走っていた。

「マダム・ボードリーって、本当に素敵な方ね。大好きだわ」

と、私がシモンズに言うと、彼女はしきりに頷きながら言った。

「マダム・ボードリーもルビコが好きだつて言っていたわ。それなら、もっと電話をかけたり遊びに行つてあげたら、どう？ 彼女も淋しいらしいから」

えっ？ マダム・ボードリーが淋しい？ それは意外なことだった。先生の口許に常にたたえられている微笑は、うちからの幸福が自然と外ににじみ出たような、ゆとりのある優しい微笑だった。まさに幸せそのものに見えた先生が淋しいとは！ 驚く私にシモンズは彼女特有の低い声で淡々と話してくれた。マダム・ボードリーとご主人は再婚同士であること。ご主人は二人の娘さんを連れて、先生は一人の娘さんを連れて、再婚された。その日山荘で一緒だったフランソワーズだけが、マダム・ボードリーの娘さんだったわけで、ご夫婦のお年が大分離れているのも、上のふたりの娘さんとフランソワーズの年がかなり離れているのも、先生に10人のお孫さんがいるのも、みんなそんなわけだった。

シモンズは低い声で続ける。マダム・ボードリーには足の不自由なお母さまがいらっしゃるが、ちょうどそのころ病気で入院中だった。とても体の弱い方らしく、去年のクリスマスころも慢性的腎臓病で1度は医者に見放されたらしいが、奇跡的に立ち直られた。だが、この1週間ほど前から、また容態が悪化した。マダム・ボードリーは暇を見つけては病院に駆付けて、夜遅くまで看病なすり、ここ数日はほとんど寝ていらっしやらないとのことだった。私たちが山荘に招くの延ばそうと考えた先生に、お母さまは「自分のためにスケジュールを変えてはいけない。楽しみにしている皆さんをぜひ山荘に招待してあげなさい」と言われたのだそうだ。

「とても優しいお母さまなのよ。足がご不自由な

のに、人に迷惑をかけてはいけないと、自分のことは全部自分でなさっていらっしやる。それなのに、また入院されて、先生も随分とご心配でしょう」

ハイウェイの白いラインはどこまでも長く続いている。窓外の黒い木々の前を、水銀灯が音をたてて後に飛んでいく。もうそろそろモントリオールにも近いころだ。暗い夜空に、今まで知らなかった先生の別のお顔が次々と浮かんで消えた……。夫に先立たれ、娘と二人きりになった先生。再婚されて、自分の年とさほど違わない娘さんたちの母となり、いきなり10人のお孫さんの祖母となられた先生。真っ白な病室で連日連夜お母さまを看病なさる先生……。女性の幸福のシンボルのように見えた先生にも、人並みの悲しみや苦労がおりあったのだ。デリケートで多感な方だから、先生は人一倍感じ、悩み、苦しまれたかもしれない。多方面に慈善活動をなさっていたのも、その淋しさを紛らすためだったのだろうか。

車はいつの間にか見慣れたモントリオールを走っていた。明るい電灯の光が家々のカーテン越しに流れ出ている住宅街には、形の良い大きな葉をつけたメープルトリの街路樹が、夏の夜風に吹かれて、常と変わらず心地よげに揺れていた。

先生のバンセ

マダム・ボードリーのお宅には、蔵書がぎっちりと詰まった大きな本棚がある。私はその書齋の雰囲気が好きで、よくそのお部屋に行き、自分にも読めそうな仏語の本を探しては、お借りしていた。もうページも黄ばんだ古い本であったり、先生の手でアンダーラインや感想が書き込まれた本である。ある日お借りした本は、人類愛がテーマだったが、びっくりするほどあちこちにチェックが入っていた。他国人の私たちにまで、いつも優しく接して下さる先生には常々感謝の念で一杯だったが、その時また新たに、娘さんやお孫さんまでも先生にとっては全然血のつながっていない他人であったのかと思うと、先生がたまらなくお気の毒のようでもあり、同時に、先生の心の広さと分け隔てのない豊かな愛情とに今さらながら敬服するのだった。

ローレンシャンの山荘で遊んだ数カ月後のある日、私はその日を最後にスチューデント・センターにおもむき、最後のフランス語のレッスンを受けた。われわれ家族は近日中に懐かしいモントリオールを去って、アメリカのボルチモアに移る予定だった。レッスンは私の感傷をよそに進められ、終わった。インド人やアフリカ人の陽気さも常と変わらな

かった。異国で友情を築いた大勢の友とお別れの握手をしたあと、とうとう、マダム・ボードリーにお別れを言わなければならない時がきた。先生は、なぜか大勢の生徒の中で私を一番好いてくださったようなので、心からお礼を述べ、お別れの言葉を言った。大好きな先生にお別れを言うのはつらい。胸一杯に秘めた種々の感情を、私の貧弱な英語でうまく言い表せるわけもなく、もどかしかった。

先生は首をかしげて私をごらんになり、ほほえまれ、「ルビコ」と私の大好きな、あのおっとりとした尻上がりの調子で言われた。

「エマニュエル・ムニエっていう人、ご存知？ その人の言葉の中で、私がいつも大切にしているバンセがあるのよ。私たちが出会った記念として、その言葉をルビコに贈りましょう」先生はそう言われて、私の手帳に美しい書体で書いて下さった。

"Etre, c'est aimer." (生きること、それは愛することである。)

先生はお別れのキスを私の両の頬にしてくださった。ほのかな甘い香水の匂いは、母のように優しい先生のいつもの香りだった。

先生が手帳に書いてくださった全文：

23 Novembre 1966

Chère Rubiko,

C'est avec beaucoup de regret que je vous vois partir. J'espère que la vie nous permettra de nous retrouver, un jour. Pour moi, cela a été une découverte de vous connaître, avec toute votre délicatesse attentive, votre amitié. Emmanuel Mounier a dit: "Etre, c'est aimer." C'est une pensée qui m'est très chère et que je veux vous laisser en souvenir de notre rencontre.

Avec toute mon amitié la plus affectueuse,

Jacqueline B. Beaudry

ヒデキの新聞デビュー

September, 1966 (瑠璃子27歳)

「ハロー、ルビコ？」電話の声は、スチューデント・センターのシモンズだ。「あしたね、仏新聞の"La Presse"の記者が、センターに取材に来ることになったの。フランス語教室に来ているあなたたちの写真も撮るそうよ。テーマはCustom of womenルビコモぜひ来てね。」フランス語教室は、モントリオール在住の学生のワイフのためのクラスで、私はもう半年くらいお世話になっている。なので、「行きます」と返事はしたもの、英語での座談会はあまり得意ではなく、ちょっと憂鬱だ。

気持ちよく晴れ渡った翌日の9月8日、もうすぐ3歳になるヒデキを連れて、約束どおりスチューデント・センターに行った。ベビーシッターがいるので、子供を連れて行けるのだ。仲間は陽気な人ばかりで、いつもうるさいほど賑やかなのだが、その日は、先生のマダム・ボードリーと生徒の私たちと子供たちのほかに、センターのシモンズやテレシア、その他見知らぬ数人も加わって、ますます大賑わいだった。天気がいいので、いつもの教室でなく外に出ようということになり、裏庭にぞろぞろと移動した。木陰の芝生に、たくさん椅子を丸く並べ、子供たちや赤ちゃんも母親と一緒に座る。お茶を飲みながら待つ間もなく、新聞社から元気の良い男女ふたりがやって来た。女性の記者と、男性のカメラマンだ。記者は早速みんなを一人ひとりメモしながら聞いてまわり、カメラマンはパチパチとあちこちから何枚も撮る。ラッキーなことに、2時間ほどの気楽な雑談だけで無事に終わった。記事は2日後の仏新聞"La Presse"に載るそうだ。

2日後の9月10日は土曜日だった。カナダでは土曜の新聞はとても分厚い。翌日の日曜は新聞までも休刊なので、その分、平日の倍くらいボリュームがある。その日はいつもの英字新聞"Montreal Star"の代わりに、仏字新聞"La Presse"を買ってみた。たとえ出たとしても、小さな記事だろうと、あまり期待はしていなかった。が、帰宅して新聞をひろげた主人が騒いでいる。釣られて新聞をのぞき込んだ私も、うわーと声をあげてしまった。出てるどころの騒ぎではない。「女性の生活」というページの全面が先日の記事と写真で埋め尽くされていたのだから。しかも驚いたことには、ヒデキひとりのバカデカイ顔写真(17x13 cm)と、ヒデキとルビコが一緒のバカデカイ写真(15x17 cm)が、なん

とページの上部3分の1を占めているのだ。7人もいたインドの女性たちは皆きれいなサリーを着て、赤ちゃんが4人、女の子が1人と数も多かったのに、たった1組の日本人母子に焦点が合わさた感じで、皆さんに申し訳ないし、おはゆい。ともかく、2枚のわれわれの写真の説明は、こうだった。

「日本人の内面の豊かさ、内に固く秘めたさま、真面目さ、聡明さのすべてが、この子供の顔に顕われている。彼は3歳、ヒデキといい、父親は東京(新潟なのに、ジャパン=東京だ!)から脳外科を学びに来た。母親のルビコ・バカザワ(私はバカザワではない!)はこのセンターの常連だが、この写真のために、子供を笑わそうと試みたが、ムダだった」

説明文を読んで、またびっくり大笑い。ヒデキがカメラマンの前で、すこぶるマジメな顔をしていたのが、カメラマンの興味を誘ったに違いない。ヒデキの口許を引き上げてスマイル・フェイスをトライするようにと、私はいわゆる「やらせ」をさせられた。その「やらせ」に応じてしまった私に対し、ヒデキは立派だった。顔色ひとつ変えず、姿勢もくずさず、そのまま微動だにせず、ガンバッタ。あっぱれ、ヒデキ。3歳にして大物の風格である。

ところで、Nakazawaの"N"が"B"に化けていたのは最高傑作で、夫と一緒にひとしきりお腹をよじつての大爆笑であった。

[注] 仏新聞原文と日本語訳

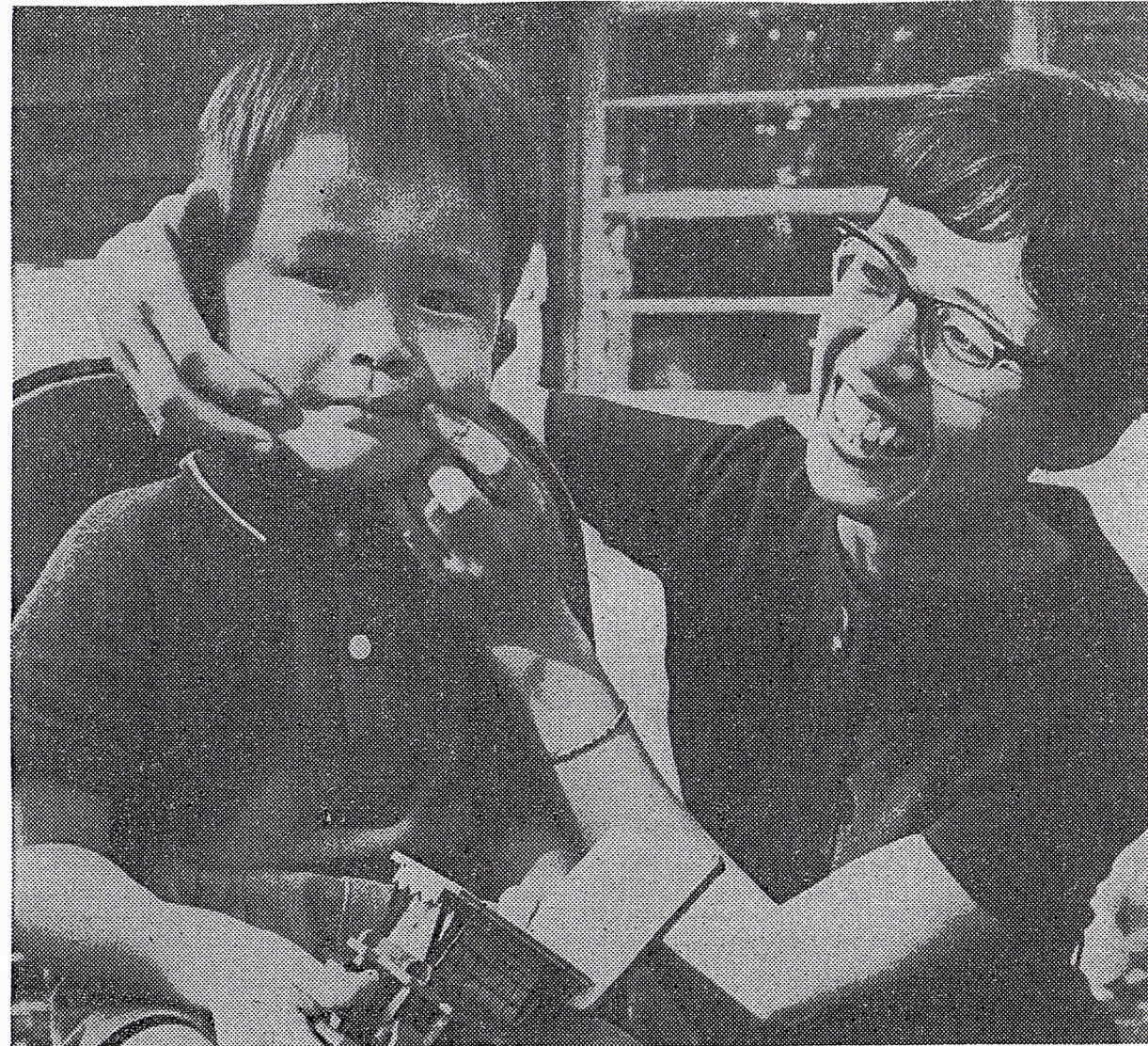
LA PRESSE, MONTREAL, SAMEDI 10
SEPTEMBRE 1966

[写真の説明文]

Toute la richesse intérieure, tout l'hermétisme, tout le sérieux et l'intelligence du Japon sur un visage d'enfant. Il a trois ans, il s'appelle : Hideki. Son père est venu de Tokyo pour étudier la neuro-chirurgie. Sa mère, Rubico Bakazawa, qui tente en vain de le faire sourire, fréquente le centre d'accueil Carrefour.

[日本語訳]

日本人の内面の豊かさ、内に固く秘めたさま、真面目さ、聡明さのすべてが、この子供の顔に顕われている。彼は3歳、ヒデキといい、父親は東京から脳外科を学びに来た。母親のルビコ・バカザワはこのセンターの常連だが、この写真のために、子供を笑わそうと試みたが、ムダだった。



Toute la richesse
intérieure, tout
l'hermétisme, tout le
sérieux et
l'intelligence du Japon
sur un visage
d'enfant. Il a trois
ans, il s'appelle :
Hideki. Son père, est
venu de Tokyo pour
étudier la neuro-
chirurgie. Sa mère,
Rubico Bakazawa, qui
tente en vain
de le faire sourire
au photographe,
fréquente le centre
d'accueil Carrefour.

